

# マーシャル『経済学原理』 ギルボウ編校訂版について

馬 場 啓 之 助

## 1 『経済学原理』改訂の外面的な経過

アルフレッド・マーシャルの『経済学原理』ほど、著者の生存中に数多くの改訂版が刊行された著書はめずらしい。その初版が刊行されたのは1890年、その翌年には早くも第2版が著わされ、爾来1920年にその第8版が公刊されるまで、前後30年にわたって、その改訂がおこなわれた。その初版の原稿が執筆され始めたのは1881年であり、その刊行までに9年を経過しているの、これを加えると、ほぼ40年、マーシャルは『経済学原理』の完成と改訂のために努力しつづけたことになる。しかも『経済学原理』はマーシャル経済学の体系の全貌を示すものではない。その体系を展開させる連作の第1巻にすぎなかった。この序論的な著書にながく取り組んでいたために、続巻の刊行を遅延させたうらみがあり、マーシャル体系の完成からいうと、『経済学原理』の改訂にいささかこだわりすぎたきらいがないでもない。

マーシャルがどうしてこれほど熱心に『経済学原理』の改訂をつづけたのか。その初版はそれほど未完成なものであったのか。また、これら度々重なる改訂をとおしてマーシャルの経済理論は実質的に変化していったのか。そういった疑問がおこってくる。これに答えるためには、まずその準備として、『経済学原理』の各版を比較対照してその異同を吟味して、判断材料を整備しておかなくてはならない。しかし『経済学原理』そのものが800ページを超える大冊であるので、この準備作業がすでにたいへん骨の折れるものなのである。ところが幸いなことに、ギルボウ編『経済学原理』校訂版 Alfred Marshall, *Principles, Ninth (variorum) edition, with annotations by C. W. Guillebaud, 2 vols (London 1961)* は、ちょうどこういう準備作業にあたる綿密な校訂を企てているのである。

ギルボウがこの校訂版の用意にかかったのは、1934年 J. M. ケインズの要請に応じたことであつたが、この仕事だけに没頭していたわけではないにしても、長年にわたる綿密な作業をへて、ようやく1961年に公刊されるに至ったのである。

この校訂版は前後2巻からなっており、その第1巻は

『経済学原理』第8版を復写したテキストを収め、第2巻は主として各版の異同、とくに第8版までに削除されている旧版の文章の復元を内容とするノートからなっている。ギルボウじしんは『経済学原理』は数多い改訂を受けたにかかわらず、そこにもられた経済理論そのものには実質的な変化はなかったという見解をとっているが、そういう見解を証明するよりも、各版異同のあとを客観的に整理したデーターを示すことに重点をおいている。ここでは、この校訂版のノートを手がかりとして、改訂の経過、主要な論点を明らかにし、多少の解釈を述べてみたい。

まず編別構成から見よう。初版は前後7編からなっていた。第1編「予備的考察」第2編「若干の基本的観念」第3編「需要もしくは消費」第4編「生産もしくは供給」第5編「需要供給の均衡理論」第6編「生産費続論」第7編「価値、もしくは分配と交換」がそれである。この編別構成は第2版においてすでに第5編と第6編が統合されて、前後6編に変更される。また編名についても若干の改訂がおこなわれる。第3編の「需要もしくは消費」は第2版で「需要と消費」とされ、第3版以降は「欲求とその満足について」と変更される。第4編の「生産もしくは供給」は第3版以降「生産要因 土地・労働・資本および組織」と改訂される。また第5編「需要供給の均衡理論」と第6編「価値、もしくは分配と交換」は第5版以降それぞれ「需要・供給および価値の一般的関係」と「国民所得の分配」と改訂される。この編別構成の変更では、第5版の改訂が目されるが、その他の改訂は形式的なもので、実質的な意味はほとんどない。

章別構成になると、もちろんかなりの改訂がおこなわれているが、そのうち顕著なものだけを拾ってみよう。

(イ) ほぼ新設されたと思われる章としては、第2版において第3編に「活動との関連における欲求」(その第2章)と「同一事物の種々な用途間の選択」(その第5章)が追加され、また第5版において第6編に「生活基準との関連における進歩」(その第13章)が新設されている。

(ロ) しばしば改訂された章としては、準地代に関連

する部分が注目される。初版の第6編の第2・3両章において「生産費 供給源に制限あるもの」を論ずるさいに、地代と並んで、準地代が論究されていたが、第2版では第5編の第8~10章において「生産物の価値との関連における生産装置の価値について 地代および準地代」としてこの問題が集約的に論明されることになる。これらの章は第4版および第5版の改訂においてさらにその章別構成にかんして変更を受ける。累次の改訂において大きく問題とされた点なのである。

(ハ) つぎに注目されるのは、第6編が「価値、もしくは分配と交換」から「国民所得の分配」に変更されたことにともなう改訂である。初版の第7編第1~3章、第2版以降では第6編第1・2両章となるが、その「分配と交換の予備的考察」が第5版以降は「分配の予備的考察」と変更され、また初版の第7編第12章、第2版以降の第6編第11章の「価値論概観」が第5版以降は「分配概観」と改訂される。

このように構成からいうと第2版と第5版の改訂が顕著であるが、その内容にわたった改稿になると、これらと並んで、第3版の改訂が注目される。第3版では、改稿の著しかった章については、その目次において星印をつけて区別している。そのような章は7章を数えている。

以上が改訂経過にあらわれた外面的な特徴である。つぎにマーシャルじしんがこれらの改訂についてどのような理由をあげているかを見ていこう。

## 2 マーシャルのあげた改訂理由

マーシャルは各版の序文でその改訂理由を説明している。ところで各版の序文のうちで、第5版の序文は初版のそれとともに、その長さにおいても内容においても際立っている。いずれもマーシャルの経済理論にかんする基本的な見解を表明しているものである。その基調においてはもちろん両者のあいだに根本的な相違はないが、その論調においては微妙なニュアンスの差異がある。この差異こそ改版の理由を理解するよい手がかりになるのではないかと思う。

初版の序文をつらぬいている論調は、「自然は飛躍せず」*natura non facit saltum* のモットーに示されるように、経済現象の根柢に「連続性」が潜んでいることを強調する点にあった。現象そのものは表面的には質差を示しているように見えても、じつは「明別できない階差をもってたがいにまじり合っており」連続性をもっているのだ。正常的なものの一時的なもの、長期的なもの、短期的なもの、いな利子と地代とでさえも、たがいに明確に区別できる断層をもってはいない。この連続性こそ

経済理論を成立させる基盤であるとして、「需給均衡の一般理論こそが分配と交換の中心問題の種々な部門のすべてにわたってこれを貫流している基礎的な理念なのである」と主張する。第5編の題目「価値、もしくは分配と交換」は、この「基礎的な理念」を簡明に表明したものにほかならない。

ところが第5版の序文においては、静学と動学、物理学のアナロジーと生物学のアナロジーといった方法上の区別を表面にだし、基本的には連続性をもった経済現象であっても、分析しようとする側面の相違に対応して、採用すべき方法にも差異があることを解明している。初版の序文の末尾において、経済現象の有機的成長にみられる連続性の想念を強調しながら、これを分析するのにクールノー風の数理解析的方法を適用できると説いるのにくらべると、たしかにニュアンスの差異がある。しかも注目すべきことには、この第5版の序文はその核心においては、マーシャルが1898年に発表した論文「分配と交換」(*"Distribution and Exchange"*, *Economic Journal*, Vol. III, pp. 37~59)と同一であり、その要約とも見られることである。この論文は『経済学原理』にたいするハドレイの批判(*"Some Fallacies in the Theory of Distribution"*, *Economic Journal*, Vol. II)に答えて、マーシャルが経済理論にかんする見解を披歴したものであるが、そのうちに初版の序文とは異なるニュアンスがすでにあらわれているのである。この論文の核心をなす第3節はこの校訂版第2巻に収録されている(*op. cit.*, II. pp. 62~75)。

論文「分配と交換」においても、「筆者は分配と交換が異なった視角から眺められてはいるが、基本的には同一の問題であるとの見解をあえて支持せんとするものである」(*op. cit.*, II, p. 66)と述べているように、初版の序文とその基調においては変わりはないが、第5編と第6編とのニュアンスの相違を明らかにすることに努めている点が注目される。たとえば、つぎのようである。「分配と交換の両面にわたって、価値を支配している諸原因にかんするわれわれの知識の理論的な背骨は第5編において一括される。『理論』という言葉がつかわれているのはこの編の題目だけである」(*op. cit.*, II. p. 72)。しかしこの理論はそのままでは第6編では役立たない。「第6編の基調は自由な人間が機械・馬あるいは奴隷と同じ原理によって働かせられるものではないという事実のうちにあるのだ。もし働かせられるものなら、価値の分配側面と交換側面とにほとんど差異がないことになろう」(*op. cit.*, II. p. 73)。じつは差異があるから、第6編

では、理論そのものではなく、これによって補強された常識が主要な用具となる。「常識はわれわれじしんの生活および祖先のそれを含めた、生活体験の生み出したものであり、動学的というよりむしろ生物学的な用具なのである」(op. cit., II, p. 73)。

このようにして、分配と交換とは価値の問題の二つの側面ではあるが、これを取扱うのに異なった方法上の用意が必要だといった意識がしだいに表面にでてきた<sup>1)</sup>。このことが、『経済学原理』改版の底流をなしていたのではないかと思われるのだ。

初版の序文においても、経済現象の連続性を強調しながらも、この連続性があらわれる「時間」の局面の相違に応じて、ニュアンスの差異があることを否定してはいない。著名な1句すなわち「ほとんどすべての経済問題の主要な困難さの中核ともいべき時間の要素」という表現は、すでに初版の序文にも記されている。しかしそこではなおマーシャルは「時間の要素はそれじたいまったく連続的である」と断定することができた。ところがこの「時間の要素」が有機的な成長と結びついてあらわれてくると、初版の主張に安住できない局面に直面しないわけにはいかななくなる。

第2版の序文において、その改訂の理由を説明するのに、「時間の要素」に関連して分配と交換の二つの局面の微妙な関係に触れている。「労務者の稼得とかれらの生産する財の価格とのあいだの相互関係が時間によってどのようにあらわれかたを異にするかをいっそう明瞭にすること」が、改訂の基本的なねらいであった。これに関連して、(イ)「短期の変動においては価格の方が主導的な要因となり稼得は副次的な役割しかはたさないが、正常価格の長期的な調整過程にあってはそれぞれの地位は逆転し、価格が稼得におよぼす影響よりも稼得が価格におよぼす影響の方が大きくなる」ことが説かれる。初版の第5編と第6編とを統合し、第5編のうちに地代と準地代とを論ずる諸章をまとめたのは、この関係を明白にするためであった。

(ロ) さらに「分配という全般的な問題が個別の事物の価値にかんする問題とは趣きを異にする顕著な特徴をもっていることを強調する」ために、第6編(初版の第7編)に改訂を加えた。個別の財の価値にかんしては、

1) マーシャルの経済理論における分配と交換の問題について、太胆な解釈をくださったものとして、山田雄三教授の論文「アルフレッド・マーシャルとくにその価格論と分配論とのつながりについて」(『一橋論叢』51巻4号所収)がある。参照されたい。

労働効率の上昇があれば、代替の原理が働いて、その財が市場にあふれるほど供給されることになるが、分配の全般的な問題にかんしては、労働効率の上昇は、国民分配をとおして、「代替と補完の二重の関係」が作用し、一般に労働の稼得率を向上させていく。労働の稼得率については、その生産費によって稼得率が一義的に決定されるわけではなく、「安楽基準」といった慣行的な生活水準が関与するばかりでなく、「生活基準」の向上にもなって労働効率、したがってまたその稼得率じたいが上昇していく。こういうマーシャルの特徴ある見解が、第2版の改訂によって取り入れられてくる。

(ハ) この見解にたてば、「旧派の経済学者があまりにも排他的に供給面の研究をおこなったことにたいする反動として、欲求の重要性を活動のそれにくらべて過大に評価する危険が生じたという点」を看過してはおけない。これに関連して第3編に「活動との関連における欲求」と「同一事物の種々な用途間の選択」といった諸章が追加される。前者は「安楽基準」と「生活基準」の区別をささえる社会哲学的思想を開示したものであり、後者は労働者の「努力」と並んで重視される資本家の「犠牲」について論明を加えたものである。

第3版においては、叙述の内容についてかなりの改稿が加えられるが、そのうち最も代表的なものは第6編の第1・2両章に加えた改訂である。この改訂の理由として、第3版の序文において、「経済学者のうちには、全般的に分配に影響をあたえるものとしては、生産要素の供給を左右する原因は需要の力のそれと共同するものではなく、これに従属するものとみる見解をとっているものもあるが、このような見方は分配の短期的な動きを取扱うには適合したものであっても、正常な分配の中心的な課題に適用するのには不適當であることを明白にするため」だと、説明される。

第4版においては大きな改訂はない。細部にわたって表現を改善するために小改訂が加えられたにすぎない。マーシャルは、第4版の序文が示すように、この第4版をもって決定版とする意図をもっていた。ところが、この第4版が刊行されたと同じ年に、前記の論文「分配と交換」が発表されている。ここでは分配と交換の「結合」よりも「分離」を強調する色合いがよよくにじみでていた。この論調の推移が、ひとたびは決定版とするつもりであった第4版にさらに改訂を加えて第5版を用意させたのであろう。

第5版においては、第6編の「価値、もしくは分配と交換」を「国民所得の分配」と改題し、新たに「生活基

準との関連における進歩」という章を追加したほか、第6編第1・2両章および第11章を交換を論じた箇所を整理して、総じて交換論と分配論と区別を明白にするにつとめた。また準地代の問題にかんしては、第5編第8～11章の叙述を整理するとともに、第6編第8章において企業者の革新にもなって成立した超過利潤が「複合的な準地代」に転化し、労働の稼得率を向上させていく過程を明白にするために、その大半を改訂した。このように、かなりの改訂がおこなわれているのだ。

第5版の改訂以降、大きな改訂はおこなわれず、第8版にいたっている。

### 3 ギルボウの解釈をめぐって

『経済学原理』改訂の理由を、各版の序文および論文「分配と交換」を手がかりとして、できるだけマーシャルじしんの文章に即して説明していこうと企ててきた。分配と交換は基本的には価値の問題の二つの側面にすぎないというのが、理論経済学者としてのマーシャルの「基礎的な理念」であったが、この二つの側面はそのあらわれかたにニュアンスの相違があることを、経済社会の有機的成長という性格に注目すればするほど、いっそうよく意識しないわけにはいかなかった。そのためにこそ、累次にわたって改訂を加えていった。これがその説明によっておのずから浮びあがってきた結論である。この結論を得るために、筆者は特別に主観的な評価を働かせたつもりはない。できるだけ忠実にマーシャルの文章を理解しようとして、この結論に到達したのだと考えている。しかしこの結論は、ギルボウの解説にあらわれているものとはいささか異なっている。

ギルボウは校訂版第2巻冒頭につけた「編者序論」において『原理』の進化 1890～1920年」を論じたのち、改訂の理由についてつぎのように解釈している。すなわち、(イ) マーシャルの経済理論は『原理』初版を刊行した1890年にすでに終極的なかたちで固まっていた、改訂をつづけていた1890～1920年においてなんらの新しい展開を示めななかった。それにもかかわらず『原理』の改訂を重ねていったのは、経済学者および一般の読者のあいだにある種の論点についてよりいっそうの究明を望む要求があることがわかったので、この要望に答えるためであった(*op. cit.*, II, p. 38)。

(ロ) マーシャルがその改訂にあたって旧版の文章を

相当削除しているが、これはかれの見解が変化したからではなくて、むしろつぎのような形式的な理由によるのである。(i) できるだけ論争をさけるために、批判のあった箇所は本質的なものでないかぎり、削除しようとしたこと、(ii) 誤解を防止するに適した表現の仕かたを発見したさいには、古い表現を削除しようとしたこと、(iii) 新しい材料を追加したさいには、さして重要でない箇所は削除して、書物のページ数がふくらみすぎるのを避けようとしたこと、これらがその理由である(*op. cit.*, II, pp. 29～30)。

(ハ) 『原理』の各版のうちでは、第3版が最善であり、それ以降の改訂は叙述の活力と生気をそこねていったきらいがある(*op. cit.*, II, p. 18)。

ギルボウは「以上の観察に編者が長年にわたってマーシャルの『原理』の八つの版について研究した結果得た個人的な結論である」と述べている(*op. cit.*, II, p. 30)。長い、骨の折れる、綿密な研究の結果形づくられた結論であるとすれば、これを権威あるものと受取るほかはないかも知れない。そうであれば、筆者の解釈のごときは、改訂を意味あるものと見ようとするあまり、いささか力みすぎたきらいがないでもない。いなそればかりではない。このギルボウ編の校訂版にそそがれた長年の努力と犠牲さえも、しょせんは的のないところにはなされた矢にすぎない。ほんらい改変のない各版であれば、あえて各版を綿密に照合してみるまでもあるまい。

しかしギルボウの解釈はマーシャルの経済理論をいささか狭義に解しすぎているのではなかろうか。ギルボウじしんマーシャルが1890年以降その「経済理論」にかんしてほとんど進展を見せなかった理由として、「老年になるにつれてかれはいよいよ経済学より実際的な側面に関心を向け、抽象的で分析的な側面にかんしてその観念を進展させようとしなかった」からであるとしている(*op. cit.*, II, p. 29)。しかしマーシャルじしんの経済学研究における基本的な関心は、『原理』初版刊行以前から、経済学の「実際的な側面」と「抽象的で分析的な側面」をどう関連させるかにあった。かれが目ざしていたのは、広い経済学である。この広い経済学に視点を定めるなら、『原理』に反映されるかぎりにおいても、筆者が指摘したような進展があり、それが『原理』の改訂を動機づけていったといえよう。